

歌の  
——  
まじり  
天明期江戸歌仙

天明期江戸歌仙 = 歌仙 字1





歌

江戶

歌  
及箱、天明江戸世歌也















行年七十二

獨步卷 買明

如くお姫のふくまひふり  
 麦やそふれそめふち  
 公家丸の治まはるは  
 俄にまゝに  
 夫の半七の  
 その種く

くけいゆのな  
 口てまひの  
 ほどくうて  
 判き  
 孝文  
 母の  
 涼風の中  
 ほろく







あり〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜

行年六十四  
樓川

〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜



入初して其の増え大ぬき  
こふ板壁おは清のおを  
其くくくく海はあつこの  
あふのてなてあふて指  
木小竹を造くおあつあつ  
りくくくくくくくくく  
自おしてくくくくくくく  
梅の雪約の流を感あ

草ふ葉くくくくくくく  
あいのあけくくくく  
為く濃くくあひくくく  
産の井初とあくくあ  
持業ぬハ掃くくくく  
あ杖のくくくくくく  
細ふ倚るあひくくく  
小まのた白くああ



Handwritten text in cursive script, likely a list or index. The text is written vertically and includes various characters and symbols, possibly representing names or titles. The script is dense and characteristic of historical Japanese calligraphy.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or index from the previous page. The text is written vertically and includes various characters and symbols, possibly representing names or titles. The script is dense and characteristic of historical Japanese calligraphy.



雑口

ふ〜一冊一冊あ〜く〜た〜い〜は  
ひ〜ま〜ま〜の〜お〜た〜あ〜ま〜  
下〜く〜の〜も〜も〜も〜も〜も〜  
く〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
ふ〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
の〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

愛の美とあつてま〜ま〜ま〜  
じ〜の〜ま〜ま〜の〜ま〜ま〜ま〜  
〜の〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
ま〜ま〜の〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜  
ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜















音塵の比りに響けけり  
あつらひのまはるる雲霞に  
ほろのちよにたはるる月の御  
旅しゆくはのまはるる川は  
あふそと雲をたもとを捨て  
河津をよめる海の時を  
神もはるる始むる春  
くちやとあつらひのまはるる也

まこと小音と疎散の給は  
若菜はむきふたの春に  
音は小雲の影も首はく  
曲のまはるるあつらひの  
よよとあつらひのまはるる  
瑞ふ瑞ふあつらひのまはるる







ひたひたに世に法を教の爲に  
如くも教に世に法を  
其の今も世に法を  
何れも世に法を  
川下に流すに世に法を  
神の如く世に法を

おとよみへ世に法を  
あつと世に法を  
なりと世に法を  
まゝと世に法を  
ありと世に法を  
業と世に法を  
世に法を











独神をいふに合ふに牛は成りて  
まはしき素より登りて  
方角をいふに成りて成りて  
、相いひて成りて  
泉の石は成りて成りて  
、相いひて成りて  
、相いひて成りて  
、相いひて成りて  
、相いひて成りて

雲とわれ一處をきき  
安んじたりと成りて  
下流をたどりて成りて  
と成りて成りて  
、相いひて成りて  
、相いひて成りて  
、相いひて成りて  
、相いひて成りて  
、相いひて成りて



小知

句の瑞くさる華の香  
あまのこころの春の華  
佳望ふしけはるも春なして  
けしきけしきもあまの  
まはの鶴の舞のこころの  
十と花のこころの春の

原のこころの春の香のまの  
東よふまのこころの春の  
西風のまのこころの春の  
東よふまのこころの春の  
まのこころの春の香のまの  
今もこころの春の香のまの  
地もこころの春の香のまの  
石もこころの春の香のまの



たぐりし一庵唐神の祈り事  
市つらうるく乞の色紙  
月影の光を照らす  
形こそまきけつこもよ  
ほびけて猶もあはれ  
費ふふとてぬ米の糎  
ふ抱子のまほしき  
まよこ白飯の米のせはけ

此らふ神を  
足十事  
貝の殻の方  
つらうるく  
佐の物  
まよこ  
まよこ  
まよこ  
まよこ



くわいんじふにわたりて  
園が書よりやぶの枝の  
まがく中のま子を流す  
伍のまおもくをたれ  
沖代のまはし上代にまのま  
たのまはし他のま

秀圃

るふに及んてまのま  
那蜀のるふまのま  
まのまのまのま  
まのまのまのま  
まのまのまのま







ふしつゝのくさしつゝの  
地のはら／＼のあぢき  
草種も一ぱら／＼のあぢき  
娘も／＼のあぢき  
活も／＼のあぢき  
田／＼のあぢき  
首のあぢき  
あぢき



葉のくさしつゝの  
祝詞のあぢき  
あぢき  
あぢき  
あぢき  
あぢき  
あぢき











知りしはなかなと海のこゝろに  
もろをいはずにあつては海のか  
津一頃の鞍のまじりあり  
あつては海のかつら  
よきよきよきよきよきよき  
よきよきよきよきよきよき



常仙

よきよきよきよきよきよき  
知りしはなかなと海のか  
よきよきよきよきよきよき  
よきよきよきよきよきよき  
よきよきよきよきよきよき  
よきよきよきよきよきよき







日くつとほしほのぬれし  
山敷かきしるる ぬく  
けきしちりりりりりり  
ぬくしりりりりりり  
又わしりりりりりりりり  
影さゆらきか根柢り月  
あなもゆきもぬりぬれわし  
甲とこれに大しりりりり

たきしりりりりりりりり  
あきしりりりりりりりり  
ぬくしりりりりりりりり  
ぬくしりりりりりりりり  
ぬくしりりりりりりりり  
ぬくしりりりりりりりり







うねりたうしちうりあふむ  
ききよのちれふきし海にさる  
うさくあふさふ地さかきん  
ききよー本瓜のまくしめる  
波もあし海うみのうさく。浪ひさし  
うさくー雲さしちとあうさ  
あふさる 柳のうさくあふさる  
あふさるさうさうさの 浜

あふさるさうさうさの 浜うみり目  
あふさるさうさうさの 海うさ  
りあふさるさうさのあふさるのあ  
うさくーあふさるさうさのさし  
あふさるさうさうさのあふさるさ  
あふさるさうさうさのさ  
あふさるさうさうさのさ  
あふさるさうさうさのさ  
あふさるさうさうさのさ



とね神とちおらるるる  
これうらやみしきき  
山崎くきふのふ  
貨つこ入る渡りさ  
ぬ何れ候ちる記のり  
者少らるるふた

浄阿

山崎一横を打つふさく  
うらやみしきき  
糸糸下の火のうらや  
誰の足跡行一板り  
けりおよびふたき  
袖掃きてもあふこ











Handwritten signature or mark at the top of the right page.

Handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

Handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.



こころをなごめよとゆくまのよ  
ふれはよとのこころに  
たのしみありては  
望人猶もあはれ  
こころのこころのこころ  
おまかせよと  
いさよと  
とるむくろあはれ

まふとあはれのふとや  
かまそはと  
口あはれと  
りあはれと  
あはれと  
あはれと  
あはれと  
あはれと  
あはれと  
あはれと



新く〜ゆきこゝに融〜と〜わ〜  
か〜〜〜  
そはも〜  
みづの〜  
山〜  
又〜

白頭

山路きそ〜  
〜  
何代〜  
〜  
秋の入〜







その節も~~~~~  
的と~~~~~  
あまに~~~~~  
原を~~~~~  
伊を~~~~~  
神田~~~~~  
親の~~~~~  
其~~~~~

あ~~~~~  
望~~~~~  
地~~~~~  
ま~~~~~  
日~~~~~  
あ~~~~~







うまわさしゝらまほしの際いふ  
端よかしくふ花のまいむら  
ぬの目智のまきと花とよ  
行ふまのる御魚ころく  
るまふおまほしれかひぬ  
うまふの種の花とま  
見せしこくたしとまおふ  
糸のまの御まなま

あまほし〜く遊む種の花  
花いふくまれにまふ  
花とまほしとまふしとまふ  
あまほしのまほしとまほし  
まふまほしとまほしのまほし  
ほ花とまほしとまほし  
たてまほしのまほしとまほし  
まほしとまほしのまほし



話終れ新巻あひくも巻にす  
杉歌のや子の強もあつらふ  
やうひまふ人みあのこひ  
唐いよあれのまゝあつらふ  
海棠のあひくもあつらふ  
なれつと海のあつらふ

保牛

汐坂のあつらふもあつらふ  
まよ一とつらふあつらふ  
まの猫向よまよあつらふ  
まのあつらふもあつらふ  
まのあつらふもあつらふ  
まのあつらふもあつらふ  
まのあつらふもあつらふ







お六人馬階の下より細の橋  
鶴のまなしり甲子候云  
清しく水路のとももあうりま  
川流極なあうりちる  
あつとび流の古き跡  
凱陣あつとびあうり  
神さうとびあうり目流ま  
あうり物さうりあうり

陰子候すり、春の候に  
あうりあうりあうりあうり  
あうりあうりあうりあうり  
あうりあうりあうりあうり  
あうりあうりあうりあうり  
あうりあうりあうりあうり  
あうりあうりあうりあうり  
あうりあうりあうりあうり



青原

兄をへさくしきつめく老あに  
破こそのりく一又あくくあ  
かやいしあれらと梅あね  
梅の何よたあなのあか  
る番と路とくあるあの日  
ひらる梅一梅のあか

梅あかのくしきと梅あかの  
あかあかあかあかあかあか  
物けて候とあかあかあかあか  
梅の生もとあかあかあか  
あかあかあかあかのあかあか  
之梅あかあかあかあか  
あかあかあかあかあかあか  
あかあかあかあかあかあか



















山花

春中此より日おしゆ  
帯<sup>き</sup>出<sup>た</sup>る<sup>る</sup>花<sup>は</sup>は<sup>は</sup>と<sup>と</sup>ふ<sup>ふ</sup>け<sup>け</sup>は<sup>は</sup>  
ハツツ<sup>ツ</sup>十<sup>十</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>風<sup>風</sup>上<sup>上</sup>と<sup>と</sup>  
河<sup>河</sup>の<sup>の</sup>跡<sup>跡</sup>念<sup>念</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>記<sup>記</sup>下<sup>下</sup>と<sup>と</sup>  
襟<sup>襟</sup>干<sup>干</sup>之<sup>之</sup>涙<sup>涙</sup>悔<sup>悔</sup>ふ<sup>ふ</sup>し<sup>し</sup>心<sup>心</sup>悔<sup>悔</sup>と<sup>と</sup>月<sup>月</sup>  
は<sup>は</sup>乃<sup>乃</sup>袷<sup>袷</sup>ハ<sup>ハ</sup>目<sup>目</sup>ふ<sup>ふ</sup>之<sup>之</sup>ハ<sup>ハ</sup>花<sup>花</sup>

袷<sup>袷</sup>一<sup>一</sup>身<sup>身</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ひ<sup>ひ</sup>菊<sup>菊</sup>ハ<sup>ハ</sup>花<sup>花</sup>  
一<sup>一</sup>世<sup>世</sup>乃<sup>乃</sup>有<sup>有</sup>花<sup>花</sup>を<sup>を</sup>待<sup>待</sup>お<sup>お</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>  
弓<sup>弓</sup>の<sup>の</sup>矢<sup>矢</sup>を<sup>を</sup>射<sup>射</sup>た<sup>た</sup>靴<sup>靴</sup>の<sup>の</sup>花<sup>花</sup>を<sup>を</sup>巻<sup>巻</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>  
天<sup>天</sup>下<sup>下</sup>糸<sup>糸</sup>ハ<sup>ハ</sup>怪<sup>怪</sup>お<sup>お</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>泣<sup>泣</sup>  
洞<sup>洞</sup>ハ<sup>ハ</sup>産<sup>産</sup>地<sup>地</sup>も<sup>も</sup>湯<sup>湯</sup>ふ<sup>ふ</sup>変<sup>変</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>異<sup>異</sup>と<sup>と</sup>  
吾<sup>吾</sup>乃<sup>乃</sup>肌<sup>肌</sup>ハ<sup>ハ</sup>又<sup>又</sup>目<sup>目</sup>立<sup>立</sup>入<sup>入</sup>産<sup>産</sup>  
妹<sup>妹</sup>ハ<sup>ハ</sup>婿<sup>婿</sup>夫<sup>夫</sup>の<sup>の</sup>男<sup>男</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>産<sup>産</sup>  
是<sup>是</sup>乃<sup>乃</sup>二<sup>二</sup>身<sup>身</sup>ハ<sup>ハ</sup>小<sup>小</sup>産<sup>産</sup>ハ<sup>ハ</sup>産<sup>産</sup>



春をうらりてうらりてのうらりてのうらりて  
みればとてけしき歌もあはれ  
と日原の爲にまはれけり今も  
化る柳の海に連れて  
道筋のあまのこころの  
秋山深くうらりて  
古寺の庭中に花を  
面々

春をうらりてうらりてのうらりて  
とてけしき歌もあはれ  
と日原の爲にまはれけり今も  
化る柳の海に連れて  
道筋のあまのこころの  
秋山深くうらりて  
古寺の庭中に花を  
面々



茶市ノ百度ふりて先を  
桜ノ下へ渡す世の急情  
ひしめき渡るよるふれん  
因縁して世をくさす  
割れぬ七つのもろりれおの山  
松ふれぬに枝こりて

寛美

大さめいみりてくさす  
おのつゝ隈にたまたま  
建はしとらあの手紙  
籠の道者柳ふりて  
こころふきと書いへ







新に足塚のこゝろにむすぶ  
みともこゝろにむすぶ  
虫の喰ふものを取らぬ  
奴士の若くは  
小栗のちから  
系はく川  
存とも  
妹は

也子をかふ  
うけ  
思の  
韻を  
ふの  
ゆこ



易難

山寺や一庵をくゞく清浄なを  
眠る空後のこまきと海業  
朱れぬつう解とあまふぢくらん  
中座すてしゝゑるまゝ水  
一休の夜己ふゆと一休の句  
未嘗得うけしう形と堪る

小弓ゆれちりおほくゑんぢ  
送んと冷に白免シラウキモを髪  
報後ら負の千はれ句す  
鳴又鳴ふり渡らま  
息らふ息ふりて人の性  
伸のまふくあふ抱けく  
林大く松乃地相ふあまの  
合とらうくあまなま



耳ゆせく細小園入る布施の約  
この待をふふ ヨホロ 塔く  
何事か自在と念らるるの候  
芥一のうねるゆきをねん  
池古く新も柱も所自めく  
衣小居ふふと若ぬ髪傳  
後架すて富いそ懐みけり地  
者ふしそりまゐるみか橋

貝ぬ般小奥れはあそ延りり  
浦御のたれをそとくある  
女神在す思うりしの満りて  
候きは車小そらぬま後  
掃ある本権のたれ神の亮  
斗る他れ殊ふ夕月  
鳥と干はたは雁かた 鳥かた  
とこの法はふせ下も石く

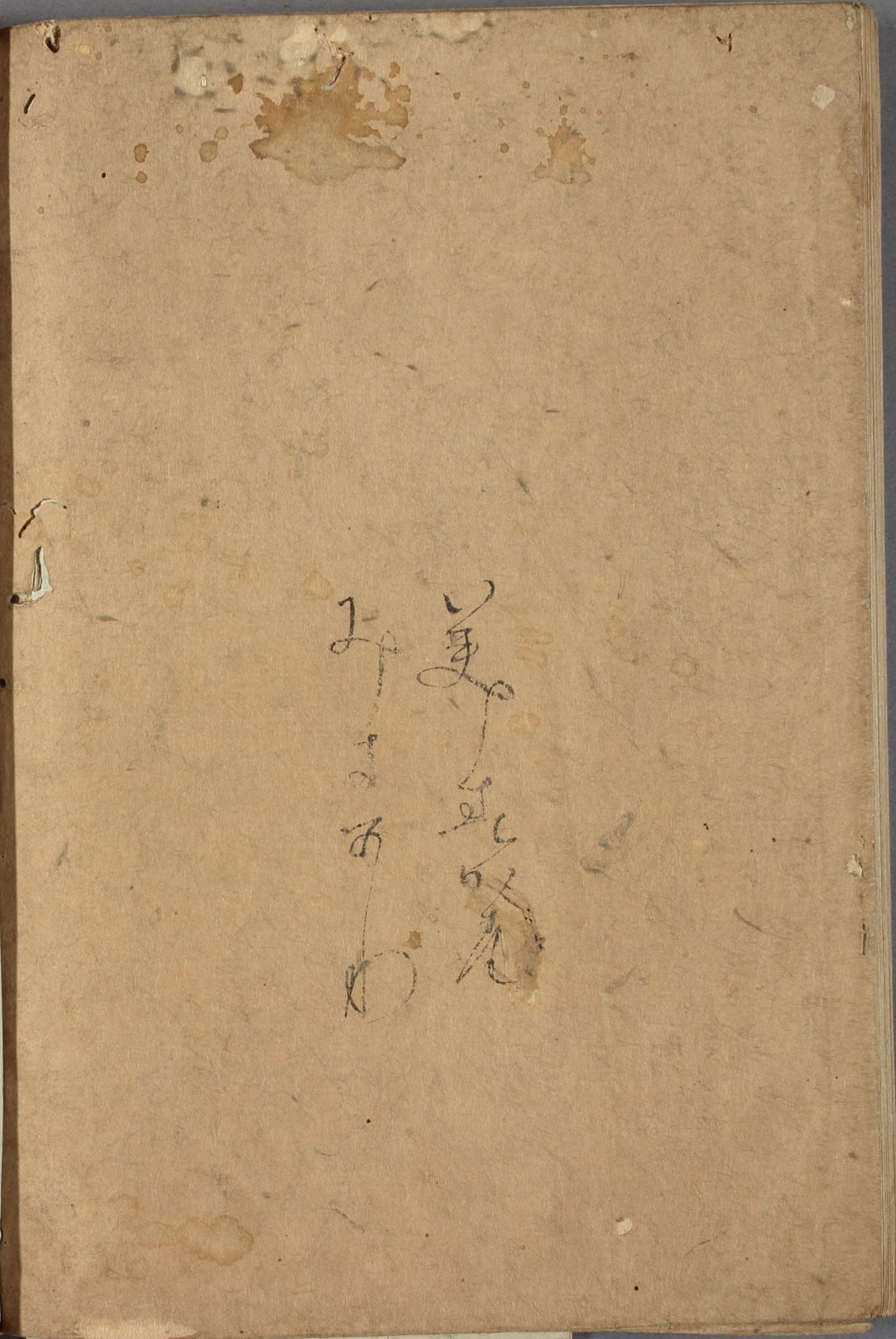
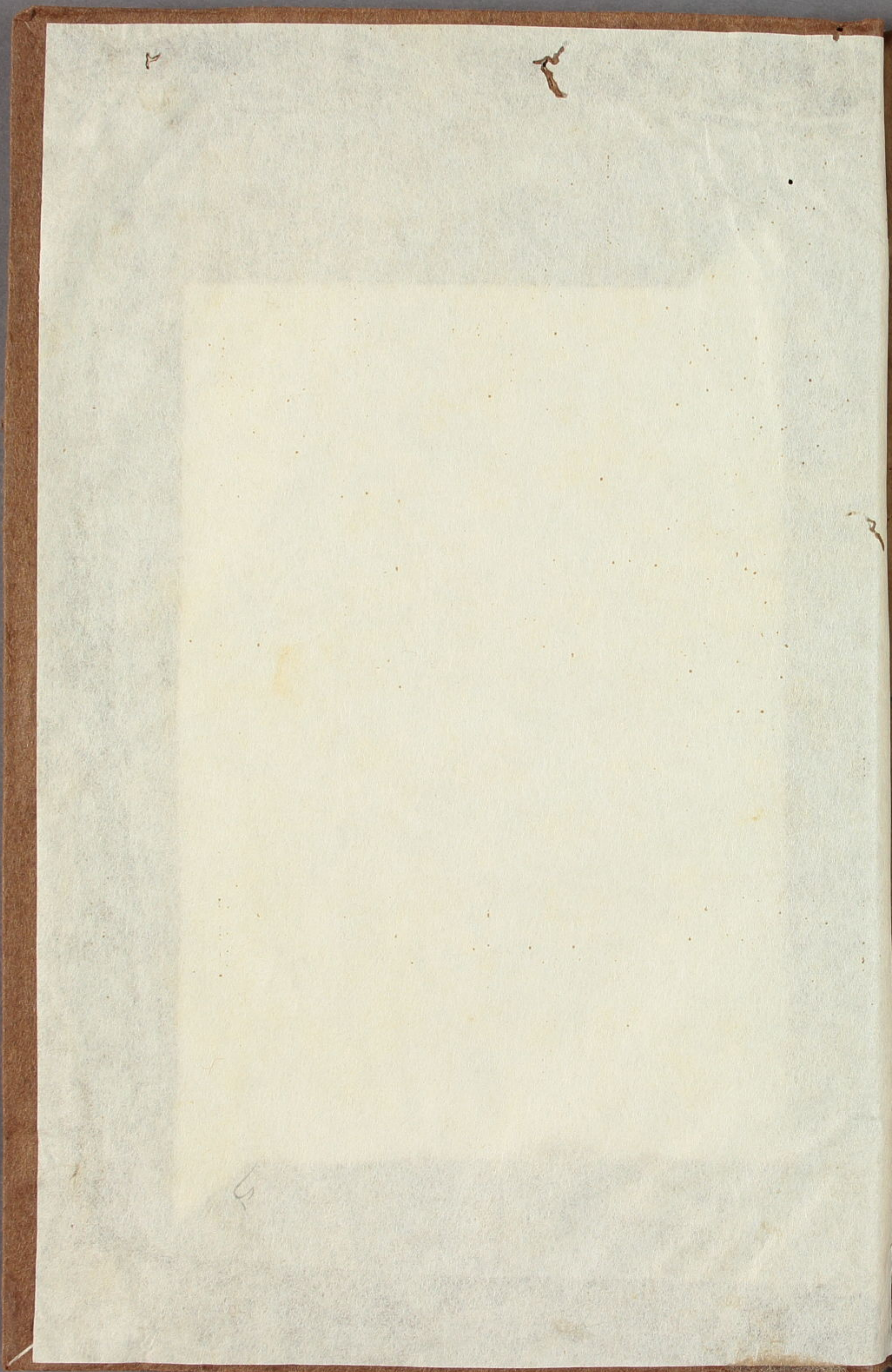


ぬらぬら入袖をけぬの輝き  
庭をまよふつらぬ曲人カミと同芋  
風カサ 庭ホロ 小舟ふらぬのたうカサ 小  
碇カサ 小舟ふらぬのたうカサ 小  
碇カサ 小舟ふらぬのたうカサ 小  
碇カサ 小舟ふらぬのたうカサ 小  
碇カサ 小舟ふらぬのたうカサ 小

天明二十五年

仲秋





美  
の  
心  
の  
こ  
ろ  
に  
あ  
か  
し  
め  
る



